

2017年4月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

善い友・悪い友

1. 概要

(1) 資料

『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』（中村元監修、森祖道・浪花宣明編集、中村元・浪花宣明・岡田行弘・岡田真美子訳、春秋社）掲載の「シンガーラへの教え」（中村 元訳）

(2) 主題

「シンガーラへの教え」に説かれる「友に似た敵」と「心のこもった友」を通して、人間関係のありかたと、人生における「善き友」について学んでみたいと思います。

2. 友に似た敵

(1) 友に似た敵

① 経文

「次の四種は敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである。すなわち

- (1) 何ものでも取って行く人、
- (2) ことばだけの人、
- (3) 甘言を語る人、
- (4) 遊蕩の仲間

は敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである」（『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 248~249）

② 友

「友」とは、本来は、「互いに助けあう者」であり、「志を同じくする仲間」です。ですから、お互いに安心して、親しく交流します。

③ 友に似た敵

この人は、いかにも親しそうに振る舞いますから「友」に似ています。しかしながら、自分本位の利益を得ることばかりを考えています。互いに助けあう間柄でもなく、志を同じくする仲間でもありません。

この人に巻き込まれると、こちらの人生・生活・家族・仕事・社会的立場などが危うくなりかねません。

こうしたことから、「敵」と言ったのでしょ

3. 何ものでも取ってゆく人

(1) 経文

「何ものでも取って行く人は、次の四つのしかたによって、敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、

- (1) 何でも〔品物を扱はず〕取って行く、
- (2) 僅かの物を与えて多くの物を得ようと願う。
- (3) ただ恐怖のために義務をなす。
- (4) 〔自分の〕利益のみを追求する。

何ものでも取って行く人は、これらの四つのしかたによって、敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 249)

(2) 何ものでも取って行く人

この人は、親しそうに振る舞いながら、こちらの持ち物を当たり前のように持っていきます。代償を置いてゆくとしても役に立たないようなものばかりです。

(3) ただ恐怖のために義務をなす

この人は、上役から怒鳴られるなど恐ろしいことが起こったときだけ仕事をします。恐ろしいことが通り過ぎると、たちまち仕事をしなくなります。

4. ことばだけの人

(1) 経文

「『ことばだけの人』は、次の四つのしかたによって、敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、

- (1) 過去のことにに関して友情をよそおい、
- (2) 未来のことにに関して友情をよそおい、
- (3) 無益なことを言って取りいり、
- (4) なすべきことが眼前に迫ると、都合が悪いということを示す。

実に『ことばだけの人』は、これら四つのしかたによって、実は敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 249)

(2) 恩着せがましい

あのときはこうしてやったと過去のことで恩に着せ、こういうときはこうしてやると未来のことで恩に着せ、現在はなんだかんだと金品などをせびり、いざというときには一目散に逃げます。

5. 甘言を語る人

(1) 経文

「実に、『甘言を語る人』は、次の四つのしかたによって、敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、

- (1) 相手の悪事に同意し、
- (2) 善事に同意しない。
- (3) その人の面前では賛美し、
- (4) その背後ではその人をそしる。

『甘言を語る人』は、これら四つのしかたによって、実は敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである」（『原始仏典第三巻 長部経典Ⅲ』春秋社、p. 249）

(2) 甘言

① 「悪事」とは、自分本位の利益を追求する行為でありましょう。「善事」とは、人さまのために貢献する行為でありましょう。

自分の利益になる悪事には飛びつきますが、自己犠牲が伴う善事には見向きもしません。

② 目の前ではこちらにおべんちゃらを使って利益を得ようとしますが、裏では平気でこちらの悪口を言います。

③ 言葉が巧みなので、こちらの心に隙があると、つい騙されてしまいます。

(3) 舌先三寸

舌先三寸とは、うわべだけのうまい言葉を語り、中身もなければまごころもないことを言います。「ことばだけの人」「甘言を語る人」は、まさしく、舌先三寸の人です。

6. 遊蕩の仲間

(1) 経文

「実に、遊蕩(ゆうとう)の仲間は、次の四つのしかたによって、敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである。かれは、

- (1) もろもろの酒類など怠惰の原因に耽(ふけ)るときの仲間である。
- (2) 時ならぬのに街路をぶらつき廻るときの仲間である。
- (3) [祭礼舞踏などの] 集会に入り込むときの仲間である。
- (4) 賭博(とばく)など遊惰(ゆうだ)なことがらに耽るときの仲間である。

これら四つのしかたによって、遊蕩の仲間は実は敵であって、友に似たものにすぎない、と知るべきである」と。

このように世尊は説かれたのである」（『原始仏典第三巻 長部経典Ⅲ』春秋社、p. 249）

(2) 遊蕩

飲酒にふけり、夜更かしをし、仕事を忘れて遊びに明け暮れ、賭博に興じるような人は、金銭を浪費し、体力を消耗し、社会的信用を失い、人生を破壊してしまうことになりかねません。

この人は、親しいふりをして、こちらをこのようなことに巻き込もうとします。

7. 四種類の敵

(1) 経文

幸ある人、師(釈尊)はこのことを説き了(お)えてから、次のように説かれた。

「何でも取ってゆく友

ことばだけの友

甘言を語る友

遊蕩の仲間

これら四つは敵である、と賢者は知って、かれらを遠く避けよかし

あたかも恐ろしい道を避けるように」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 250)

(2) 避ける

釈迦牟尼世尊はシンガーラに、こうした人びとは「友に似た敵」だから、「危険な道を避けるように遠く避けなさい」と教えます。

相手を怒らせたくない、相手に悪く思われたくない、相手に良く思われたい。そのような気持ちが湧いてきて、ご機嫌を取ったり、いやな事でも引き受けたり、間違っていると思いつつも行ったりしてしまうことがあります。

儲け話などうまい話をされると、求める気持ちが起きて、耳を傾けることがあります。

そうこうするうちに、相手に巻き込まれて、翻弄されてしまいます。

このようなことにならないために、「かれらを遠く避けよかし」と注意を促しているのだと思います。

(3) 精進・忍辱

相手を怒らせようが、相手に悪く思われようが、相手から良く思われまいが、柔軟な姿勢で真理の道を歩み続けることが肝要です。

甘い言葉は、貪欲の心で聞いてはいけません。

どんな状況に陥っても、どんな仕打ちを受けても、真理の道を歩み続ける修行が、八正道における正精進であり、六波羅蜜における忍辱と精進です。

8. 四種類の心のこもった友

(1) 経文

これらの四種類の友人は親友〔心のこもった友〕であると知るべきである。すなわち、

- (1) 助けてくれる友、
- (2) 苦しいときも楽しいときも一様に友である人、
- (3) ためを思って話してくれる友、
- (4) 同情してくれる友

は親友であると知るべきである。（『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 250）

(2) 親友

「親友(心のこもった友)」は、親しい交わりのなかで、こちらの人生・生活・家族・財産・社会的立場などを守ってくれる人です。このような「親友(心のこもった友)」を持つと同時に、自分もまた多くの人に人にとっての「親友(心のこもった友)」になりたいものだと思います。

9. 助けてくれる友

(1) 経文

「『助けてくれる友』は、次の四つのしかたによって、親友である。かれは、

- (1) 友が無気力なときに、まもってくれる。
- (2) 友が無気力なときに、その財産をまもってくれる。
- (3) 友が恐れおののいているときに、その庇護者となってくれる。
- (4) なすべきことが起ったときに、必要とする二倍の財を給してくれる。

『助けてくれる友』は、これら四つのしかたによって、親友であると知るべきである」

（『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 250）

(2) 友をまもる

- ① 「無気力なとき」「恐れおののいているとき」は、正常な思考・判断ができなくなっています。このため、行動を誤ってしまう危険性があります。

このようなときに誤った行動を止めて、正しい行動に向かわせるのが親友の務めです。

- ② 「必要とする二倍の財を給する」とは、なにかをしてあげるときは、中途半端では終わらせないということだと思います。

10. 苦しいときも楽しいときも一様である友

(1) 経文

「『苦しいときも楽しいときにも一様である友』は、次の四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。その友は、

- (1) かれ(相手)に秘密を告げてくれる。
- (2) かれの秘密をまもってくれる。
- (3) 困窮に陥ったときにも、かれを捨てない。
- (4) かれのためには生命をも棄てる。

『苦しいときにも楽しいときにも一様である友』は、これら四つのしかたによって、親友である、と知るべきである」(『原始仏典第三巻 長部経典Ⅲ』春秋社、p. 250)

(2) 信頼関係

- ① ここでは「秘密を告げる」「秘密を守る」「生命をも棄てる」など、自他一体であることが強調されています。
- ② 深い信頼関係に結ばれている間柄なら、苦しいときでも、楽しいときでも、互いを思いやる心が変わることはありません。家族、友人は、こういう関係でありたいものです。

11. ためを思って話してくれる友

① 経文

「実に、『ためを思って話してくれる友』は、次の四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。かれは、

- (1) 悪を防止し、
- (2) 善に入らしめ、
- (3) 未だ聞かないことを聞かせてくれ、
- (4) 天に至る道を説いてくれる。

『ためを思って話してくれる友』は、実にこれら四つのしかたによって、親友である、と知るべきである」(『原始仏典第三巻 長部経典Ⅲ』春秋社、p. 250~251)

(2) 真理の言葉

「七仏通誡偈」を思い出させる一節です。「悪を防止し」は「諸悪莫作」に通じます。「善に入らしめ」は「衆善奉行」に通じます。

「未だ聞かないこと」とは、この場合「真理の教え」ではないでしょうか。

「天に至る」とは「幸福になる」ことです。

1 2. 同情してくれる友

(1) 経文

実に、『同情してくれる友』は、次の四つのしかたによって、親友である、と知るべきである。かれは、

- (1) その人の衰微を喜ばない。
- (2) その人の繁栄を喜び、
- (3) 他の人がかれをそしるのを弁護してくれ、
- (4) 他の人がその人を称賛するのを説きひろめる。

実に『同情してくれる友』は、これら四つのしかたによって、親友である、と知るべきである」
このように世尊は説かれた。(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 251)

(2) 我が身の如く

「同情してくれる」とは、「自分のことのように思ってくれる」という意味だと思います。これもまた、自他一体の境地です。

1 3. 四種類の心のこもった友

(1) 経文

幸ある人、師(釈尊)はこのことを説いたあとで、また次のように説かれた。 ——

「助けてくれる友と

苦しいときにも楽しいときにも友人である人と

ためを思って話してくれる友と

同情してくれる友と ——

実にこれらの四種が友である、と賢者は知って

真心をこめて、かれらに尽くせよかし —— 」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 251)

(2) 親友を大切に

賢者(智慧のある人)なら、このような友こそ親友であると知って、まごころを込めて交流することでしょう。そして、自分もまた相手の親友となるべく、心を込めて尽くすことでしょう。

1 4. 戒めをたもつ

(1) 経文

「あたかも母がおのが子をいつくしむがごとく

戒めをたもっている賢者は

〔山頂に〕燃える火のように輝く」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 251)

(2) 戒め

戒めとは、仏の教えを学び、自分はこの道を歩み続けると自ら決意した道です。信仰的に言えば、仏さまにお誓いした道です。

自分の人間的成長に伴い、戒めも成長していきます。

(3) 智慧のある人

智慧のある人(賢者)は、我が子を大事にするように、戒めを大事にして、神々しい人格を身に備えることでしょう。

それも、親友(心のこもった友)を持つことによってなしうることなのです。

1 5. 財産の集積

(1) 経文

「蜂(はち)が食物を集めるように働くならば

〔かれの〕財産はおのずから集積する

あたかも蟻(あり)の塚の高められるようなものである

このように財を集めては

かれは家族に実によく利益をもたらす家長となる。」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 251~252)

(2) 人間としての務め

「友と似た敵」と交わらず、「親友(心のこもった友)」と交わる人は、自分のなすべき仕事に精を出すことができます。世の中の役に立つ仕事をすることは人間としての務めであり、生きがいです。このような人は、財産を蓄積し、家族に幸福をもたらすことができるでしょう。

1 6. 財産の使い方

(1) 経文

「その財を四分すべし。〔そうすれば〕かれは実に朋友を結束する。

一分の財をみずから享受すべし

四分の二の財をもって〔農耕・商業などの〕仕事を営むべし

また〔残りの〕第四分を蓄積すべし

しからば窮乏の備えとなるであろう」(『原始仏典第三巻 長部經典Ⅲ』春秋社、p. 252)

(2) 財産は誰のものか

自分で仕事をして得た財産だから、すべて現在の自分のものだと思いがちです。しかし、そうではないことが、この経文に記されています。

(3) みずから享受する

- ① 「一分をみずから享受すべし」とあります。集めた財産の一部を、自分と家族の生活・人生のために使うのです。この分だけは、自分と家族のものになります。
- ② このとき「必要なものが、必要なときに、必要なだけあればよい」という考えを持つことが重要です。「少欲知足」という教えもあります。

(4) 仕事を営む

「四分の二の財をもって〔農耕・商業などの〕仕事を営むべし」とあります。仕事の運転資金や資本金として使うのです。

仕事は社会的な営みです。仕事に使う財産は、社会的な財産であると言えます。集めた財産の多くは社会的な財産であると、経文は言っているのです。

(5) 窮乏の備え

「〔残りの〕第四分を蓄積すべし しかれば窮乏の備えとなるであろう」とあります。財産の一分は、未来のための財産なのです。

(6) 朋友を結束する

「友に似た敵」を持たず、「心のこもった友」を持って、勤勉に働いて得た財産を、正しく使うならば、友人たちからの信頼が深まるに違いありません。

こうして互いに「親友（心のこもった友）」になれば、こんなに心強いことはありません。

(7) 正命

「八正道」のひとつに「正命(しょうみょう)」があります。

「正命」について、庭野日敬師は「正しい仕事や人のためになる職業による正しい収入で暮らしを立てなさいということです」（庭野日敬著『新釈法華三部経』佼成出版社、p. 85）と解説しています。

その具体的なありかたが、ここに示されていると見ることができます。